

ISSN 2434-9690

東アジア国際 言語研究

創刊号

東アジア国際言語学会
2020年1月

目次

ごあいさつ	鈴木康之 (i)
[特別寄稿]	
文の材料としての単語と連語	鈴木康之 (1)
名詞と使役動詞 (V-(サ)セル) からなる連語	早津恵美子 (5)
[対照研究]	
構造で作る派生空間詞	高橋弥守彦 (25)
日本語の「を格」、「から格」の空間名詞と自動詞との組合せに対応する台閩語の 連語との比較	施 淑恵 (36)
「ノニ」文と中国語“关联词”訳の対照研究	孫 宇雷 (51)
「習得」に関する動詞の語彙的意味の分析——日中の結果複合動詞を中心に——	蘇 丹 (61)
「のだ」文と焦点・強調的“是”字文との対照研究 — 対訳における 意味伝達と形式選択から—	曹 銀閣 (72)
「飛び+V」と“跳/飞+V”についての一考察	陳 雄洪 (82)
拡張意味単位からみた日中同形語の対照研究—「精神」を例として—	梁 鵬飛 (92)
[日本語研究]	
不可能形式による禁止表現	李 楠 (103)
コーパスに基づく類義語の意味分析の研究—「はがれる、むける」などを中心に—	李 響 (111)
日本語の存在文と所在文の置き換えに関する一考察	鄧 超群 (121)
新聞社説における譲歩表現に関する分析—その談話機能を中心に—	単 艾婷 (131)
日本語の「内の関係」連体修飾節のモダリティについての考察	張 静苑 (142)
類型論的にみる日本語の目的語名詞の定性	魯 美玲 (153)
『萬葉集』にみられるオノマトペ—AB型を中心に(その式)—	王 則堯 (164)
[中国語研究]	
中国語の仮定複文における前後節の関係標識について	新田小雨子 (174)
時量詞構文における焦点について	福本陽介 (184)
歴史的に見た離合詞—“请客”“生气”“见面”—	石井宏明 (195)
小説の地の文における“SV了O”文の成立条件	白石裕一 (205)
現代中国語の数量詞について	洪 安瀾 (218)
“把”構文における可能表現についての再考	小路口ゆみ (229)
位置移動の動詞“过”のスキーマについて	蘇 秋韵 (239)
二空間の質的対立から見た“过”の通過義について—「境界プロフィール」と 「場所プロフィール」に着目して—	佐々木俊雄 (250)
清末北京語動詞の実態—張廷彦『支那語動字用法』と『動字分類大全』に基づいて—	許 辰晨 (261)
2019年月例会発表記録	(272)
編集後記	(274)
執筆者一覧	(275)
英文目録	(276)

「習得」に関する動詞の語彙的意味の分析

——日中の結果複合動詞を中心に——

An Analysis of Lexical Semantics for Verbs of “Acquire”:

A Comparative Study of Japanese and Chinese Resultative Verb Compounds

蘇丹

SU Dan

Abstract

According to the four aspectual verb classes of Vendler (1967), Japanese verb group meaning “acquisition” could be classified as activity verbs and achievement verbs. Although there are verb compounds like “*manabi-toru*” in Japanese, most of them are the verbs like “*syuutoku-suru, masutaa-suru, osameru...*”. On the other hand, resultative verb compounds (or RVCs) as “*xué-huì, xué-dào*” could be observed in Chinese. In this article, the difference between “*xué-huì, xué-dào*” “*manabi-toru*” and “*syuutoku-suru, masutaa-suru, osameru*” should be focused on. Shen (2013) has showed that, Chinese RVCs have the potential CAUSE CHAIN in lexical level, so that <ACT> + <CAUSE <BECOME>> should not fit Chinese RVCs as Japanese. As the result, Japanese verbs like “*syuutoku-suru, masutaa-suru, osameru*” are similar with “*manabi-toru*”, but different from Chinese RVCs like “*xué-huì, xué-dào*” by the state of CAUSE CHAIN.

キーワード：語彙意味論、達成動詞、結果複合動詞、日中対照研究

目次

1. はじめに
2. 中国語の結果複合動詞について
3. 日本語の結果複合動詞について
4. 「習得」に関する動詞についての日中対照
5. おわりに

1. はじめに

本稿での「習得」に関する動詞は、知識や技能を身につけるという意味を持つ類義動詞のグループを指す。Vendler (1967) の動詞の4分類に従えば、「習得」に関する動詞は活動動詞

(activity verb) と達成動詞 (accomplishment verb) という2つのタイプに分けられる。具体的にいえば、前者には「勉強する、学習する、学ぶ、習う」などがあり、後者には「習得する、マスターする、修める」などがある。また、同じ意味の中国語に対応させると、活動動詞の場合は“学习”“学”となり、達成動詞の場合は“学会”“学到”となる。従って、動詞の形態からみれば、同じ達成動詞の場合では、日本語で単純語の動詞がよく使われるのに対して、中国語で結果複合動詞が達成の意味を表す。本稿では、日本語と中国語の複合動詞について、V1・V2の意味関係の観点から、先行研究に従って項構造の受け継ぎ方の違いを明らかにする。

なお、影山 (1996) によれば、達成動詞は「状態変化使役」の意味を示し、その意味では CAUSE (使役) という概念で動作と状態変化の結果を連結する。本稿の対象となる状態変化使役を表す中国語の結果複合動詞の“学会”“学到”と、日本語の「学びとる、習得する、マスターする、修める」において、CAUSEの働き方を明確にする必要がある。

2. 中国語の結果複合動詞について

中国語の結果複合動詞は、前項動詞と後項動詞 (以後、それぞれ V1、V2 とする) で合成され、V1 が動作を、V2 が状態変化を表し、V2 は V1 によって引き起こされる結果である。これはすでに、Li and Thompson (1981)、申 (2009)、望月・申 (2011)、于 (2015) などの先行研究で述べられている。本節では Li and Thompson (1981)、望月・申 (2011) を通して、中国語の結果複合動詞の下位分類を V1・V2 の意味関係、あるいは V1・V2 の品詞などによって明らかにする。また、項構造で動詞を表記するために、Li (1990) の項構造の表記法を挙げる。

Li and Thompson (1981) によれば、V1・V2 の意味関係からみた分類は (1) で示す4つのタイプである。具体的にいうと、Cause (使役)、Achievement (到達)、Direction (方向)、Phase (局面) という4つである。しかし、Li and Thompson (1981) で (1a) は V1・V2 の意味関係を示すが、(1b)(1c)(1d) は V2 の意味に焦点を置き、V2 が表す意味の「到達」「方向」「局面」によって区別される。

また、(1a) は Cause (使役) の意味関係を示すが、(1b)(1c)(1d) でも使役の意味が見られる。例えば、(1b)(1c)(1d) の例で“写清楚”“跳过去”“跑出来”“用完”の V1 の動作を通して、状態変化を本動詞の主語か目的語にさせると理解できるので、V1・V2 の意味関係において使役の意味も見られる。しかし、その例の中で、“买到”“关掉”のような動詞の V2 の“到”“掉”が表す状態は、本動詞の主語と目的語と関係なく、V1・V2 の使役関係を持っていない。従って、Li and Thompson (1981) による結果複合動詞の分類の基準は意味関係だけではなく、V2 の意味も用いられている。

(1) a. Cause

我把茶杯打破了（私は茶碗を割った）／他把门拉开了（彼がドアを引き開けた）

b. Achievement

我把那个字写清楚了（私はあの字をはっきりと書いた）／

他买到了那本字典（彼があので辞典を買った）

c. Direction

他跳过去了（彼が飛び越した）／他们跑出来了（彼らが走って外へ出た）

d. Phase

他的钱用完了（彼のお金は使いきられた）／把电视关掉（テレビを消してください）

Li and Thompson (1981: 55-56) 日本語訳：筆者

望月・申 (2011) では結果複合動詞の述語の組み合わせは概略 4 種類に分類されている。(2) が示しているように、V1 はすべての動詞が担うことが可能である。さらに、V2 が結果状態を表すために、ほとんどの場合は状態変化を表す非対格動詞あるいは形容詞が担っている。また、例外として (2d) に示されるように、“-会”（～ができる）、“-懂”（～を理解する）などの状況を表す他動詞が担う場合も見られる（望月・申:2011）。

- (2) a. 動作を表す他動詞＋ {非対格動詞／形容詞}：喝醉、推开(门)、打破(窗户)
- b. 非能格動詞＋ {非対格動詞／形容詞}：哭湿(手帕)、喊哑(嗓子)、坐直(身子)
- c. {非対格動詞／形容詞}＋ {非対格動詞／形容詞}：累坏(身体)、醉倒
- d. 動作を表す他動詞＋状態を表す他動詞：学会(英語)、听懂(俄语)

望月・申 (2011: 4)

申 (2009) では結果複合動詞について、項構造などによって“推开”型、“哭走”型、“跳烦”型及び“跌倒”型、“吃腻”型、“下输”型、“玩忘”型という 6 つのタイプを挙げている。その中で、複合動詞の項構造は Li (1990) の表記法に従って表記されている。

Li (1990) では 1 及び 1' は、それぞれ V1 及び V2 の主語、2 及び 2' は、それぞれ V1 及び V2 の目的語を表す。つまり、V1 の項構造は <1, 2>、V2 の項構造は <1', 2'> で表す¹⁾。例えば、申 (2009) で結果複合動詞の 6 つの分類は項構造を (3) のように表記する。

- (3) a. “推开”型： <1, 2>＋<1', > → <1, 2-1'>
- b. “哭走”型： <1, >＋<1', > → <1, 1'>
- c. “跳烦”型及び“跌倒”型：<1, >＋<1', > → <1-1', >
- d. “吃腻”型： <1, 2>＋<1', > → <1-1', 2>
- e. “下输”型： <1, 2>＋<1', 2'> → <1-1', 2-2'>
- f. “玩忘”型： <1, >＋<1', 2'> → <1-1', 2'>

¹⁾ Li (1990) で用いた項構造の表記方法は、ただ主語と目的語を表し、「1 が外項、2 が内項」を表すわけではない。

以上の先行研究を通じて、中国語の結果複合動詞の分類、V1・V2 の意味関係と項構造の表記法を明らかにした。つぎに、日本語の複合動詞の分類などについて考察していく。

3. 日本語の結果複合動詞について

影山 (1993) において、すべての複合動詞は、「語彙的複合動詞」(飛び上がる、押し開く) と「統語的複合動詞」(払い終える、食べすぎる) の2種類に分けられる。そのうち、前者は語彙部門で、後者は統語部門で形成される。例えば、V1・V2 の意味関係からみると、「語彙的複合動詞」での意味関係は「並列関係」「付帯状況」「手段・様態」と分析される。「統語的複合動詞」では完全に透明かつ合成的であり、「手紙を書き終える=手紙を書くことを終える」(影山 1993: 78) のように、補文関係として分析できる。

「語彙的複合動詞」の下位分類について、影山 (1993) は V1・V2 が表す事象の時間順序を、「同時に進行する」と「V1 が V2 に先行する」という2つの状況に分けている。「並列関係」「付帯状況」は前者の状況であり、「手段・様態」は後者の状況を示している。また、由本 (2005) は影山 (1993) に基づき、「因果関係」「補文関係」を加えて、5種類の語彙的複合動詞を区別した。

(4) a. 並列関係 (恋い慕う) V1 (恋い) + V2 (慕う) \Rightarrow [[LCS1] AND [LCS2]] (t1=t2)²⁾

b. 付帯状況・様態 (持ち寄る) V1 (持ち) + V2 (寄る) \Rightarrow $\left[\begin{array}{c} \text{[LCS2]} \\ \text{WHILE [LCS1]} \end{array} \right]$ ³⁾ (t1=t2)

c. 手段 (押し倒す) V1 (押し) + V2 (倒す) \Rightarrow $\left[\begin{array}{c} \text{LCS2} \\ \text{BY LCS1} \end{array} \right]$ ⁴⁾ (t1 \geq t2)

d. 因果関係 (溺れ死ぬ) V1 (溺れ) + V2 (死ぬ) \Rightarrow $\left[\begin{array}{c} \text{LCS2} \\ \text{FROM LCS1} \end{array} \right]$ (t1 \geq t2)

e. 補文構造 (書き落とす) [LCS2...[LCS1]...]⁵⁾ 由本 (2005: 108, 109, 126)

日本語の複合動詞の分類は以上の内容だけでなく、姫野 (1999) が行った動詞の意味特徴による分類 (方向性、接着性・接合性、創出・完成、単独性・共同性などの意味特徴) も可能である。しかし、本稿では複合動詞の V1・V2 の意味関係から、本動詞との関係を分析す

²⁾ t1 は、LCS1 の時間、t2 は LCS2 の時間を表す。"t1=t2" は LCS1 と LCS2 の同時性、"t1 \geq t2" は LCS1 が LCS2 と同時に起こるか、先行することを示す

³⁾ 「付帯状況・様態」の場合では、Jackendoff (1990) の表記方法に従い、付帯状況を表す LCS1 は限定修飾句 (restrictive modifier) として下の段に位置付けている。

⁴⁾ 由本 (2005) は影山 (1993) を基にして、V1 が V2 に先行する場合に、「手段」「因果関係」という2つの状況に分けている。また、区別する基準として、「手段」に V1 の意図性が見られる一方、「因果関係」には V1 の意図性が見られない。

⁵⁾ 由本 (2005) の「補文関係」は影山 (1993) の「補文関係」と同じタイプの複合動詞であり、「項の同定は、V2 の項として V1 の LCS をまるごと埋め込むことで自動的に起こる」(由本 2005: 130)。

るので、(4) の分類に着目して、複合動詞の項構造などを考察する。

つぎに、中国語の結果複合動詞と対応できる日本語の複合動詞をまとめる。中国語の結果複合動詞は「動詞＋補語」の構造であり、日本語の補文関係の複合動詞と対応する。しかし、日本語の複合動詞を検討すると、中国語の結果複合動詞と対応するのは(4d)の「補文構造」の複合動詞だけではない。望月・申(2011)によれば、(4b)の「付帯状況・様態」でV2が「方向性・経路位置関係」を表す場合は、中国語の結果複合動詞に対応しうる。また、(4d)の意図性を持たない「因果関係」も対応しうる。つまり、以上の先行研究を通して、中国語の結果複合動詞と対応しうる日本語の意味関係は「補文関係」「因果関係」「付帯状況」を挙げることができる。

中国語と日本語の結果複合動詞の内部構造の違いは沈(2013)によって検討された。Jackendoff(1990)、影山(1996)などは、CAUSE CHAINのモデルを提案した。CAUSE CHAINでは構成要素としての原因と結果がCAUSEによって連結される。沈(2013)によれば、日本語と中国語は同様にV1・V2を複合して表示するが、日本語は語彙レベルで複合するのに対して、中国語は統語レベルで複合する。そこで、(5)で示すように日本語ではCAUSEという関数が顕在的に表示されるのに対して、中国語ではCAUSEは潜在的に表示される。中国語の結果複合動詞は統語的複合動詞と見なされると沈(2013)は主張している。

(5) 日・中の共通点と相違点 () は潜在的であることを表す)

a. 語彙レベルの複合 (日本語) : [x ACT ON y] + [x CAUSE [y BECOME...]]

b. 統語レベルの複合 (中国語) : [x ACT ON y] + [(x CAUSE) [y BECOME...]]

沈(2013: 378)

従って、本節で中国語の結果複合動詞は意味関係から、日本語の語彙的複合動詞と幅広く対応することを見た。しかし、中国語の結果複合動詞はV1・V2が統語レベルで複合し、統語的複合動詞に対応するという主張もある。以上の先行研究に基づいて、「習得」に関する動詞について、日中対照の観点から結果複合動詞の“学会”、“学到”、“学びとる”の項構造とCAUSE CHAINを分析していく。

4. 「習得」に関する動詞についての日中対照

本節では複合動詞である“学会”“学到”と「学びとる」の項構造から、複合動詞全体の項とV1・V2の項との受け継ぎ方を明らかにする。さらに、複合動詞で「他動性調和性」と「直接目的語制約」という主語と目的語の制約が本稿の対象となる複合語に適用できるかどうか検討する。最後に、複合動詞の“学会”、“学到”、“学びとる”、及び達成動詞の「習得する、マスターする、修める」におけるCAUSE CHAINの働き方を比べ、内部構造の違いを見つける。

4.1 日中結果複合動詞の“学会”、“学到”、“学びとる”

複合動詞の“学会”、“学到”、“学びとる”を対象として、まず、中国語の“一会”、“一到”の結果複合動詞と日本語の「一とる」の複合動詞の意味を把握する。そのために、Li and Thompson (1981)、申 (2009)、沈 (2013) 及び由本 (2005) を参照して説明する。中国語の“一会”、“一到”が表す意味として、“学会”は「学ぶ」+「できる」であり、“学到”は「学ぶ」+「成功する」の意味である。日本語の「一とる」の複合動詞の「学びとる」は「学ぶ」+「とる」の意味である。3つの複合動詞はすべて、V2がV1の目的として意図的に行われるものと理解できる。

まず、中国語の場合に、“学会”の“学”と“会”はともに他動詞であるが、“学到”の“到”は非対格自動詞と認められる。従って、中国語の“学会”“学到”は、それぞれ申 (2009) の分類での (3a) “推开”型と (3e) “下输”型の2分類に当てはまる。“学会”、“学到”の実例は次の例 (6) (7)となる。

- (6) 他 在 学校 里 学会 三国 语言, ……
 彼 いる 学校 中 習得する 3つの国 言語
 彼は学校で3つの国の言語を習得した (《不必要的胜利》, 契诃夫)⁶⁾
- (7) 我们 从 歌者 那里 学到 了 唱歌 的 技术, ……
 私達 -から 歌手 そこ 学びとる LE 歌い の 技
 私達は歌手から歌いの技を学びとった
 (《生命之书 365 日的静心冥想》, 克里希那穆提)

また、日本語の場合に、例 (8) のように「学びとる」のV1・V2も“学会”と同じく、「他動詞+他動詞」の複合構造となる。

- (8) 他人や物・環境と対応していく基礎的なありかたや、価値観・規範等を学びとる。
 (『子どもと文化』, 古田足日)

以上のV1・V2の分析によって、複合動詞の“学会”、“学到”、“学びとる”の項構造を明らかにする。本稿ではLi (1990) の項構造の表記法に従う。

中国語の“学会”のV1・V2の主語と目的語が同定⁷⁾され、本動詞の主語と目的語はそのまま受け継がれる。“学到”のV2の“到”は非対格自動詞なので、主語だけを持っている。“到”の唯一の主語は“学”の目的語と同定される。“学到”の本動詞の主語は、“学”の主語と一致し、目的語が“学”の目的語と“到”の唯一の主語と一致する。日本語の「学びと

⁶⁾ 例 (6)–(8) で、中国語の例文は「大数据与语言教育研究所」の『BCC 语料库』というコーパスを利用し、日本語の例文が国立国語研究所による『BCCWJ 中納言』を利用した。

⁷⁾ 影山 (1993) によれば、同定 (identification) は同一指標化 (co-indexation) とも呼ばれる。項の同定 (θ 同定と呼ぶ) は語彙的複合動詞の性質から導き出される一般的な操作である。

る」は“学会”と同様に、V1・V2の主語と目的語が同定される。従って、“学会”、“学到”、“学びとる」の項構造は以下のようにまとめられる。

(9) “学会”、“学到”、“学びとる」の項構造

学会 : [$\langle 1, 2 \rangle + \langle 1', 2' \rangle \Rightarrow \langle 1-1', 2-2' \rangle$]

学到 : [$\langle 1, 2 \rangle + \langle 1', \quad \rangle \Rightarrow \langle 1, 2-1' \rangle$]

学びとる : [$\langle 1, 2 \rangle + \langle 1', 2' \rangle \Rightarrow \langle 1-1', 2-2' \rangle$]

“学会”、“学到”、“学びとる」の項構造は上のように示される。しかし、同じ主語であっても、意味役割を考える必要がある。

“学会”は申(2009)での(3e)“下輸”型と似ている。つまり、“学会”の主語は、V1とV2にとって同一の主語である。しかし、“学会”のV2は状態を表す他動詞なので、主語は「経験者」(Experiencer)と理解できる。“学会”はV1・V2が「主要部右側の関係」で、本動詞がV2の項構造を受け継いでいる。つまり、“学会”は複合動詞として“会”と同じように、主語が「経験者」であり、目的語が「対象」となる。

“学到”は(3a)“推开”型と一致し、「他動詞+非対格自動詞」の複合構造である。V2の“到”の意味は「着く」で、非対格動詞の主語が「対象」と見なされる。“学到”の主語と目的語は、V1の主語と目的語を受け継いで、「主体」(agent)と「対象」(Theme)を表す。

「学びとる」は由本(2005)での(4c)「手段」に対応する。つまり、V1がV2に先行し、V1は意図性を持つ原因となり、V2は結果である。「学び」と「とる」は各々の主語・目的語が同定され、「学びとる」の主語と目的語の意味役割とも一致している。

(10) “学会”、“学到”、“学びとる」の意味役割

- a. “学” + “会” \Rightarrow “学会”
 (主体, 対象) + (経験者, 対象) \Rightarrow (経験者, 対象)
- b. “学” + “到” \Rightarrow “学到”
 (主体, 対象) + (対象,) \Rightarrow (主体, 対象)
- c. 「学び」 + 「とる」 \Rightarrow 「学びとる」
 (主体, 対象) + (主体, 対象) \Rightarrow (主体, 対象)

“学会”、“学到”、“学びとる」の項構造と意味役割の受け継ぎは(9)(10)の内容となる。次に、日本語に適用できる「他動性調和の原理」と「直接目的語制約」という制約が、中国語の結果複合動詞にも適用できるかどうか検討する。

4.2 結果構文の主語と目的語の制約について

「他動性調和の原則」は影山(1993)では外項を持つ動詞同士と外項を持たない動詞同士は複合できるが、それ以外の複合は許されないという主語に関する制約である。「他動性調

和の原則」によって、V-V 複合動詞は最大限5種類の組み合わせ⁸⁾が可能である。

前節の (9) に従い、“学会”、“学到”、“学びとる”の外項と内項で示す V1・V2 の項構造は (11) で示している。それを通して、“学会”、“学到”はともに「他動詞+他動詞」の組み合わせであり、“学到”だけが「他動詞+非対格」の組み合わせである。そこで、“学会”、“学びとる”は「他動性調和の原則」が適用できるが、“学到”には適用できないという結論が出る。

(11) “学会” : (x <y>)+(x <y>)

“学到” : (x <y>)+ <y>

「学びとる」 : (x <y>)+(x <y>)

沈 (2013) で“小偷居然把警察追累了”(泥棒は意外にも、警察官に追われた結果、警察官を疲れさせた)の“追累 (追う+疲れる)”は、他動性調和に従わない例として挙げられる。

“追累”は (11) の“学到”同じ状況で、「他動詞+非対格」の組み合わせである。従って、沈 (2013) の観点によれば、他動性調和は日本語に適用できるが、中国語の複合動詞の組み合わせはより複雑で適用できない場合もある。その原因について結果複合動詞の CAUSE CHAIN と関係づけている。

Levin & Rappaport Hovav (1995) などによれば、英語の結果複合構文には「直接目的語制約」(DOR: Direct Object Restriction) が見られる。「直接目的語制約」というのは、「結果を表す状態動詞は、本動詞の(疑似)直接目的語のみを叙述する」(沈 2013: 390) という制約である。例えば、(12) での flat (平らな) は pounded (砕いた) の直接目的語である metal (金属) を叙述している。

(12) The blacksmith pounded the metal flat.

x	pound	y	flat	Levin & Rappaport Hovav (1995: 50)
		v		

“学会”、“学到”、“学びとる”で「直接目的語制約」が適用できるかどうかについて例 (13) を通して検討する。例 (13) は“学会”、“学到”、“学びとる”を使い、主語と目的語を統一して設定する。

(13) a. 张三 学会 了 英语 (DOR : ○)

Zhangsan study-grasp -PERF English

b. 张三 学到 了 英语 (DOR : ○)

Zhangsan study-reach -PERF English

c. 张三**は**英语**を**学び**と**った。 (DOR : ○)

前節の (9) で既に示したように、“学会”、“学びとる”の目的語が V2 に受け継がれて、“学

⁸⁾ 「他動性調和の原則」による5つの組み合わせは、「他動詞+他動詞」、「非能格+非能格」、「非対格+非対格」、「非能格+他動詞」、「他動詞+非能格」である。

到”の目的語がV2の主語となる。従って、“学会”、“学到”、“学びとる”には2つの状況があるが、どちらもV2が本動詞の目的語を叙述する。(13)の例はすべて「直接目的語制約」が適用できると考えられる。

しかし、中国語の結果複合動詞では「直接目的語制約」が適用しない場合も存在する。例えば、沈(2013)で挙げた例として、“张三学遍了英语”(張三は英語を学んだ結果、張三は嫌になった)(沈2013:392)は「直接目的語制約」に違反している。沈(2013)の観点によれば、結果複合動詞にCAUSEがあれば、「直接目的語制約」が適用される。CAUSEがなければ、「直接目的語制約」に違反する。従って、“学会”、“学到”、“学びとる”にはCAUSEがあるという結論が出る。

また、中国語の“学会”“学到”にCAUSEがあるか否かは、処置構文(把構文)化と受動文(被構文)化によって検証できる。沈(2013)によれば、CAUSEがある場合に処置構文化と受動文化が成立する。なぜなら、CAUSEがある複合動詞は他動性が高いので、処置構文と受動文に変換できるからである。例(13a)(13b)を処置構文化と受動文化すると、(14)(15)の例文となる。“学会”の処置構文化と受動文化は成立するが、“学到”の処置構文化と受動文化の例文では多少違和感がある。

(14) a. 张三 把 英语 学会 了。

Zhangsan DISP English study-grasp -PERF

b. ?张三 把 英语 学到 了。

Zhangsan DISP English study-reach -PERF

(15) a. 英语 被 张三 学会 了。

English PASSIVE Zhangsan study-grasp -PERF

b. ?英语 被 张三 学到 了。

English PASSIVE Zhangsan study-reach -PERF

本節の結果を通して、「他動性調和の原則」の適用は“学会”、“学びとる”では成立するが、“学到”では適用できない。それに対して、「直接目的語制約」は“学会”、“学到”、“学びとる”においてすべて適用できる。この現象の原因は、動詞にCAUSEが含まれるか否かと深く関係づけられる。次の節でCAUSEについて分析していく。

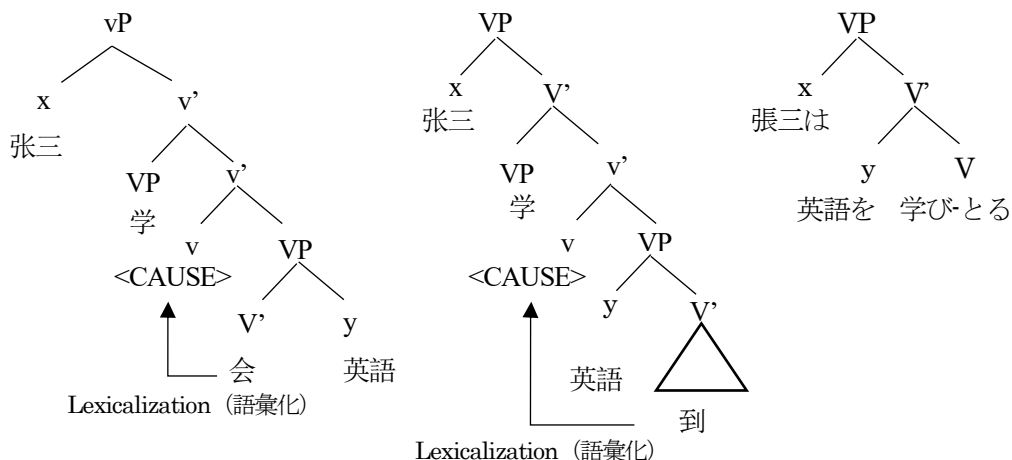
4.3 CAUSE CHAIN についての比較

前節の(5)で述べたように、日本語はCAUSEという関数が顕在的に表示されるのに対して、中国語ではCAUSEが潜在的に表示されるという観点が、沈(2013)によって提案された。さらに、中国語の結果複合動詞は統語的複合動詞とみなされる。この2点は(16)の統語構造を通して、“学会”“学到”“学びとる”にも適用できることがわかった。(16a)と(16b)のように“学会”“学到”のCAUSEは統語レベルにあり、潜在的である。また、「学びと

る」の CAUSE は語彙レベルにあり、顕在的であるので、統語構造には見られない。つまり、(16) の3つの場合はすべて CAUSE を持っている。

(16) “学会” “学到” 「学びとる」の統語構造：

a. “学会” (CAUSE 潜在) b. “学到” (CAUSE 潜在) c. 「学びとる」 (CAUSE 顕在)



それに対して、影山 (1996) 式の LCS (語彙概念構造) によれば、「習得する、マスターする、修める」のような達成動詞は [x ACT (on y) CAUSE [BECOME [x BE AT z]]] で表される。その中で、CAUSE という概念によって、原因となる活動 [x ACT (on y)] と、結果となる状態変化 [BECOME [x BE AT z]] を連結させている。「習得する、マスターする、修める」の CAUSE は語彙レベルにあるので、顕在的と見なされる。

5. おわりに

本稿では「習得」に関する結果複合動詞の“学会”、“学到”、“学びとる”を対象として、V1 と V2 の意味関係及び、本動詞との関係进行分析し、動詞の項構造と意味役割によって主語と目的語への制約を考察した。その結論と深く関係する CAUSE CHAIN の問題を統語構造で明らかにした。

“学会”、“学到”、“学びとる”では、“学会”、“学びとる”では V1・V2 の主語と目的語がそのまま本動詞に受け継がれるのに対して、“学到”の V2 は非対格動詞であるので、V2 の主語が本動詞の目的語となる。それゆえに、“学会”、“学びとる”は「他動性調和の原則」に従うが、“学到”は「他動性調和の原則」に従わない。また、“学会”、“学到”、“学びとる”には CAUSE が含まれ、複合動詞の他動性が高いので、「直接目的語制約」が適用できる。“学会”、“学到”、“学びとる”の統語構造で分析した CAUSE のあり方について、中国語の結果複合動詞の“学会”、“学到”での CAUSE は統語レベルにあり、潜在的 CAUSE と見なされる。それに対して、「学びとる」は達成動詞の「習得する、修める、マスターする」と同じく、CAUSE が語彙的レベルにあり、顕在的 CAUSE である。

今後の課題として、CAUSE と結果複合動詞の関係及び、中国語の結果複合動詞と語彙的複合動詞・統語的複合動詞の関係をさらに詳しく考察していきたい。

参考文献

- 于一楽 (2015) 「中国語結果複合動詞の意味構造と項の具現化」 由本陽子・小野尚之 (編) 『語彙意味論の新たな可能性を探って』、開拓社：102-129
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』、ひつじ書房
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論：言語と認知の接点』、くろしお出版
- 沈力 (2013) 「結果複合動詞に関する日中対照研究：CAUSE 顕在型と CAUSE 潜在型を中心に」 影山太郎 (編) 『複合動詞研究の最先端：謎の解明に向けて』、ひつじ書房：375-411
- 申亜敏 (2009) 『中国語結果複合動詞の意味と構造：日本語の複合動詞・英語の結果構文との対照及び類型的視点から』平成 21 年度博士論文、東京外国語大学地域文化研究科
- 申亜敏・望月圭子 (2009) 「中国語の結果複合動詞：日本語の結果複合動詞・英語の結果構文との比較から」小野尚之 (編) 『結果構文のタイポロジー』、ひつじ書房：407-450
- 姫野昌子 (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』、ひつじ書房
- 望月圭子・申亜敏 (2011) 「日本語と中国語の複合動詞の語形成」『汉日语言对比研究论丛第二辑』2、北京大学出版社：46-72
- 由本陽子 (2005) 『複合動詞・派生動詞の意味と統語—モジュール形態論から見た日英語の動詞形成—』、ひつじ書房
- Charles N. Li and Sandra A. Thompson 1981. *Mandarin Chinese: A Functional Reference Grammar*, Berkeley: University of California Press
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav 1995. *Unaccusativity: At the Syntax- Lexical Semantics Interface*, Cambridge, MA: MIT Press
- Li, yafei 1990. On V-V compounds in Chinese. *Natural Language and Linguistic Theory* 8: 177-207
- Jackendoff, Ray 1990. *Semantic Structures*, Cambridge, MA: MIT Press
- Vendler, Zeno 1967. *Linguistics in Philosophy*. Ithaca: Cornell University Press
- コーパス
- 現代日本語書き言葉均衡コーパス中納言版 <<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>>
- BCC 語料庫 <<http://bcc.blcu.edu.cn/>> (荀恩东, 饶高琦, 肖晓悦, 臧娇娇 (2016) <大数据背景下的 BCC 語料庫的研制> 《語料庫語言學》)